

複数の視点から社会問題を考えるモデル授業開発

—環境教育分野「捕鯨論争」を教材として—

河野 崇

1 はじめに

近年、学校現場では従来とは違った能力が求められるようになってきた。平成 20 年中央教育審議会答申「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について」では、総合的な「知」の必要性を指摘しており、狭義の知識や技能のみならず、自ら課題を見つけ考える力、柔軟な思考力、知識や技能を活用して課題を解決する力の重要性を示している¹。また、中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」では、知識や技能を活用して、複雑な事柄を問題として理解し、答えのない問題に解を見出していくための批判的、合理的な思考力の重要性を指摘している²。これらのことは、一方向的な知識伝達型教育からの転換を意味しており、単に知識を習得するだけでなく、知識、技能、態度といった総合的な「知」の育成を目指した、新たな学びの場の在り方が問われているといえる。

こうした能力が求められ始めた背景の 1 つに、知識基盤社会の到来があげられる。文部科学省「教育の情報化ビジョン～21 世紀にふさわしい学びと学校の創造を目指して～」では、競争と技術革新が絶え間なく起こる知識基盤社会の到来によって、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく、新しい知や価値を創造する能力の必要性が増大してきているとしている³。

グローバル化や情報化の進展、少子高齢化などの社会の急激な変化は、社会のあらゆる面に影響を与えており、これまでとは違った能力が必要な時代になってきた。そして、個人にとっても社会にとっても将来の予測が困難な時代が到来しつつあることから、答えのない問題を批判的に読み解き、自分自身で情報を吟味し、何が正しく、何が間違っているのかを批判的に読み取る力が求められているといえる。

2 批判的思考の重要性

樋口は、思考の中で、「自らの判断、事実や意見の分析、筋道立った手続きといった特徴を持つ思考は、批判的思考と呼ばれ、欧米において強調されている。」と批判的思考の重要性について述べている⁴。

しかし、今日の児童生徒の思考力について、筆者の小学校教諭としての経験から述べると、次のような課題があげられる。例えば、授業で質問をしたとき、すぐに「分かった」

「知っている」と発言する子どもがいる。しかし、その内容を聞いてみると、理由の乏しいものや、根拠のない思いつきの発言であったりすることがある。また、難しい課題や少し複雑な問題に出会うと、考えようとしないうちがいたりする。話し合い活動では、自分の意見を持たない、主体性のない子どもも見られる。友達と意見や考えが違ふと不安になり、ノートやワークシートに自分の意見が書かれていても、発言しない子どもの姿も見られる。

樋口は、思考することについて次のように述べている⁵。「『思考する』『考える』といっても、そこには多様な意味が含まれている。『内容を理解する』『どうすべきか判断する』『うまくいくように工夫する』『問題を解決する』といった人間の行為には、すべて思考が伴う。」

また、次のようにも述べている⁶。「『分析』『比較』『総合』『推理』『問題解決』『意思決定』『判断』『発見』『創造』等、思考の要素も多岐にわたっており」と、思考の要素について言及している。

学校教育、特に授業の中で、子どもたちのどのような行為に思考が伴い、どのような手段・方法で、どういった思考の要素を育成していけるのかを考えていく必要があるといえる。

3 問題の所在

変化の激しい時代、情報やニュースが氾濫する時代、先行き不透明な時代にあつて、今日の子どもの実態を踏まえた上で、情報や他者の主張を鵜呑みにするのではなく、自分自身の考えについても本当にそうなのかと疑いながら、複数の視点から論理的に分析することを通して、問題解決や意思決定を行っていく批判的思考力の育成が求められている。それゆえ、児童生徒の批判的思考力を育成することは、今日の重要な課題となっている。

そこで、義務教育段階において批判的思考力を育成する授業について、手立てや方法を示しながら、授業モデルを設計して提案することができれば、批判的思考力の育成を図る授業について、その方向性を提案できるのではないかと考え、研究を行うことにする。

こうした研究課題を踏まえ、本研究では、現代社会の諸問題の中で、「捕鯨論争」を事例とする教材開発と授業実践を行い、批判的思考力の育成を図る授業について提案をする。そして、次の手順に基づき研究を行うことにする。

- ①批判的思考力とは
- ②批判的思考力の育成を図る授業モデルの視点
- ③現代社会の諸問題「捕鯨論争」の教材化
- ④開発授業の実践

⑤実践的検証、有効性の把握

4 クリティカルシンキングとは

批判的思考力を英訳するとクリティカルシンキングという。本論文では、批判的思考力とクリティカルシンキングは同義のものとして扱うことにする。クリティカルシンキングを論じる上において、その定義について確認していくことにする。鈴木・竹前・大井は、クリティカルシンキングについて次のように定義している⁷。

「与えられた情報や知識を鵜呑みにせず、複数の視点から注意深く、論理的に分析する能力や態度」

E. B. ゼックミスタと J. E. ジョンソンは、クリティカルな思考について、「適切な基準や根拠に基づく、論理的で、偏りのない思考」と述べている⁸。また、クリティカルな思考には次の3つの主要な要素が含まれるとしている⁹。

- ①問題に対して注意深く観察し、じっくり考えようとする態度
- ②論理的な探求法や推論の方法に関する知識
- ③それらの方法を適用する技術

つまり、クリティカルシンキングは思考能力と態度から成り立っており、データや資料から得られる情報を基に、複数の視点から論理的に分析し、物事を判断する能力や態度とすることができる。

楠見・子安・道田は、批判的思考力の要素について次のように述べている¹⁰。「批判的思考は、スキル・知識と態度に支えられている。スキルと知識は認知的要素、態度は非認知（情意）的態度に分類できる。」また、次のようにも述べている¹¹。「知識には、論理的な探求や推論の方法に関する領域普遍的なものテーマに関わる領域固有のものがある。」
「スキルは、論理的な探究や推論の方法を適用するための手続き的知識である。」
「スキルと知識を認知的要素として一体として扱う。」
「態度は、直面する問題やテーマを十分検討し熟慮、探究し、証拠に基づいて客観的に判断すること。」

楠見らの主張から、批判的思考力とは、

- ①知識
- ②技能（スキル）
- ③態度

の3つの要素から成り立つといえる。そこで、本論文ではこの3つの要素について、次のような目標を掲げてその育成を図ることにする。

・知識目標として、現代社会の諸問題について、様々な資料や情報を論理的に分析して理解することができる。

・技能目標として、現代社会の諸問題に対して、複数の視点から多面的・多角的に考察し、意思決定を行うことができる。

・態度目標として、社会的問題に関心を持ち、課題解決に向けて主体的に学習に取り組むことができる。

5 一般化モデル

本論文では、国際社会で盛んに論争されている「捕鯨」を教材として取り上げる。我が国にとって文化・生活と深い関わりのある捕鯨の存続と、国際社会で叫ばれているクジラの保護について、様々な立場の考えにふれることを通して、現代社会の諸問題に対して、批判的に考える能力を育てることを目標としている。授業では、捕鯨問題についての4つの観点、環境^{12・13}・伝統¹⁴・産業¹⁵・消費^{16・17・18・19}の資料を比較、検討し、捕鯨問題についての理解を図る。その上で、様々な立場、視点から総合的に考えて、今後の在り方についての意思決定を行う。以上のような学習を通して、生徒が現代社会の諸問題に対して、多面的・多角的に考察を行うことを介して、各自の判断を下していく姿を期待している。

以上の学習を展開するために、次の3つの視点を取り入れて授業開発を行うことにする。

- ①複数の視点から比較、分類して考える学習活動を設定する。
- ②対立軸をもって考える活動を展開する。例えば、賛成・反対、つづける・やめるといった対立する学習場面を意図的に作り出すことである。
- ③決定する場面を学習活動の最後に位置づける。

以上の3点を学習展開に盛り込むことによって、クリティカルシンキングの育成を図る学習活動が展開できるとし、その提案を行うことにする。

6 授業構想

2008年度版中学校学習指導要領では、社会科・公民的分野において、以下のような目標が定められている²⁰。

(4) 現代の社会的事象に対する関心を高め、様々な資料を適切に収集、選択して多面的・多角的に考察し、事実を正確にとらえ、公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる。

上記の目標は、クリティカルシンキングの要素と多くの部分で重なる。例えば、社会的事象に関心を持ち、主体的に学習に取り組むことは態度面と関わってくる。諸資料を収集、選択する学習活動では、複数の視点から論理的に分析することが求められる。社会にある課題に対して、諸資料を基に考察し、よりよく問題を解決する方法を考えていくことは、批判的思考力と関係が深い。

以上のような目標を踏まえ、生徒が社会的な諸事象に対して、多面的・多角的に考察を行うことを介し、自分の意思を決定する姿を志向し、授業を構成する。

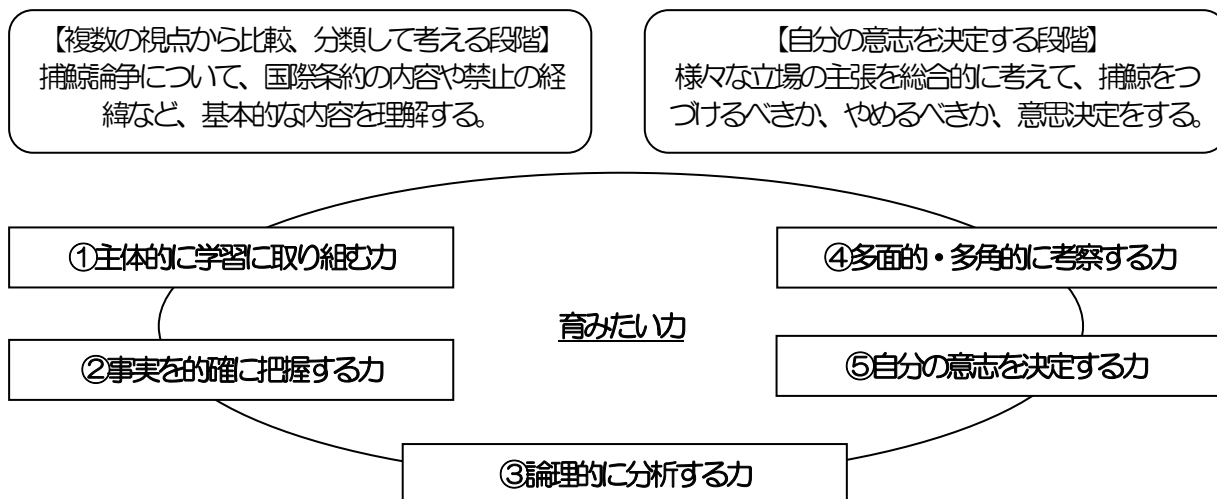


図1. 開発授業と育みたい力

○本実践で考える新しさについて

本実践で考える新しさは以下の点に求める。

- ・題材としての新しさ

本実践では、「捕鯨」という現在の社会において、その是非が問われている問題を扱う。現在の社会で盛んに論争されている題材を扱い、文化・生活としての捕鯨の存続と、国際社会で叫ばれているクジラの保護について、複数の視点から論理的に分析することを通して、現代社会の諸問題に対して、批判的に考える能力を育てることを目標として授業を構成する。

以上の内容を踏まえ以下のように構成を考える。

1. 主題

「複数の視点から社会問題を考える授業～捕鯨論争を通して～」

2. 単元の位置づけ

公民科・教育出版『中学社会 公民 ともに生きる』第1章「わたしたちの暮らしと現代社会」「1. わたしたちが生きる現代社会」の1単元として構成

3. 目的

商業捕鯨の一時停止が命じられる中で捕鯨文化の衰退が叫ばれている。このような社会の状況において、複数の視点から捕鯨問題を考えることによって、現代の諸問題に対して、批判的に考える力を養う。

4. 単元の目標

- ①社会的諸事象に関心を持ちながら、主体的に学習に取り組むことができる。
- ②社会的諸問題について、様々な立場・視点から総合的に考えることができる。
- ③捕鯨問題について、歴史的背景や社会的諸事象と関連づけてまとめることができる。
- ④捕鯨問題について、様々な資料やデータを基に理解することができる。

5. 本時の目標 (2/2)

- ①学習活動を通して、捕鯨を巡る諸問題に関心を持ち、主体的に学習に取り組むことができる。
- ②捕鯨存続の是非について、4つの資料を論理的に分析して考えることができる。
- ③話し合い活動において、互いの立場を尊重して、社会的合意形成する力を養う。
- ④4つの資料を基に、捕鯨を巡る諸問題について正しく理解することができる。

6. 指導構想 (全2時間)

第1時 捕鯨論争について、国際条約の内容や禁止の経緯など、基本的な内容を理解する。

第2時 捕鯨論争についての基本的な内容を理解した上で、捕鯨に対する様々な立場の主張を総合的に考えて、捕鯨をつづけるべきか、やめるべきか、意思決定をする。

7. 単元計画 全2時間 ()の数字は時間数

次	場面	学習内容	資料	身につけさせたい力
1 (15)	導入	「捕鯨論争」との出会い 捕鯨論争の基本的な内容の確認 捕鯨禁止の経緯、背景、条約 学習問題の設定	国際捕鯨取締条約 国際捕鯨委員会 捕鯨についての日本の基本的な考え方	主体的に学習に取り組む力
1 (35)	展開①	捕鯨論争について考える 捕鯨賛成派の主な主張 捕鯨反対派の主な主張 捕鯨論争における立場の決定 (第1次意思決定) 意見交流	捕鯨賛成国の主な理由 捕鯨反対国の主な理由	事実を的確に把握する力 論理的に分析する力
2 (40)	展開②	異なる立場の主張 産業・仕事・消費・愛護 様々な主張を総合的に考えた上で、捕鯨論争における最終的な立場の決定 (第2次意思決定) 意見交流	からくり人形の写真 クジラの歯を使った工芸品の写真 捕鯨漁師新聞記事 クジラ肉について、推移、消費、意識調査のグラフ 動物愛護団体ホームページ	多面的・多角的に考察する力 自分の意志を決定する力
2 (10)	まとめ	学習を通して学んだこと まとめ	社会に潜む問題	

8. 評価

- ①捕鯨を巡る諸問題に関心を持ち、主体的に学習に取り組むことができたか。
- ②捕鯨存続の是非について、4つの資料を見比べて考えることができたか。

③捕鯨についての諸資料や友達の意見から、自分の意見をまとめることができたか。

④捕鯨を巡る諸問題について正しく理解することができたか。

9. 授業展開

	教師による主な発問・指示	教授・学習活動	子どもの反応 ■資料内容
導 入 (15)	<ul style="list-style-type: none"> ・ある写真を見せます。何の写真でしょう。 ・少しヒントを出します。しっぽがみえます。 ・江戸時代の漁師がクジラを捕まえている写真です。 ・この写真を見た感想を教えてください。 ・何そうもの船で、クジラを取り囲みながら捕まえているのが分かると思います。 ・クジラを捕まえることを捕鯨といいます。 ・なぜクジラを捕まえているのでしょうか。 ・これはクジラの肉の写真です。 ・日本では、江戸時代よりも昔から、クジラを食用の肉として食べてきました。 ・しかし、世界各地で、クジラの捕りすぎによって、クジラが絶滅の危機に瀕していると主張され始めました。 ・そして、次のような条約が公布されました。 ・条約にはどんなことが書かれていますか。 ・こうした条約を受けて、国際捕鯨委員会という組織が設立されました。 ・モラトリアムとは、クジラに回復期間を与えて、捕鯨一時停止を見直すことです。 ・では、こうした捕鯨を巡る世界の動きについて、日本はどう考えているでしょう。 ・これは、捕鯨賛成国と反対国の表です。 ・捕鯨について、つづける・やめると、意見が分かれている問題を、捕鯨論争といいます。 ・今日は、この捕鯨論争について、みんなで考えていきたいと思います。 	<ul style="list-style-type: none"> T 発問する P 答える T 説明する T 発問する P 答える T 説明する T 発問する P 答える T 説明する T 説明する T 説明する T 発問する T 発問する P 答える T 説明する T 発問する P 答える T 紹介する T 提示する 	<ul style="list-style-type: none"> ・大きな魚のように見えるけど、はっきり分らない。 ■スライド（江戸時代の捕鯨写真、クジラのしっぽが見えるようにする） ■スライド（江戸時代の捕鯨写真、ブラインドを消す） ・大きい船がたくさんあるのが分かる。 ・大勢の船でクジラを取り囲んでいるようだ。 ■スライド（捕鯨という言葉） ・捕まえてクジラを食べるため。 ■スライド（クジラの肉の写真） ・クジラは色んな部位が食べられているのが分かる。 ・昔の人はクジラを食べていたようだ。 ■スライド（捕鯨の是非を問う裁判写真） ・クジラの捕獲数はこれほど必要なかど、世界各地で議論をしているようだ。 ■スライド（国際捕鯨取締条約） ・クジラを将来に残すための条約。 ・クジラに回復期間を与える必要があるようだ。 ■スライド（国際捕鯨委員会） ■スライド（モラトリアムの説明） ■スライド（捕鯨についての日本の基本的な考え方） ・クジラを食料として食べていきたい。 ■スライド（捕鯨賛成国、反対国の表） ・賛成 39 カ国、反対 49 カ国と、意見が対立していることが表から読み取れる。 ・捕鯨について、世界各地で意見が分かれていることを捕鯨論争というようだ。

<p>展 開 ① (35)</p>	<p>・日本をはじめとする捕鯨賛成国の主な理由、イギリスをはじめとする捕鯨反対国の主な理由は、どのような理由でしたか。</p> <p>・捕鯨について、食料資源なので、ずっとつづけたいと主張する立場と、絶滅の危機に瀕しており、やめた方がいいと主張する立場があります。</p> <p>・では、この2つの主張を聞いて、自分はどちらの立場を支持しますか。</p> <p>・ワークシートを配ります。ここに賛成国、反対国と書いてあります。支持する方に丸を書いてください。そして、支持する理由を書いてください。</p> <p>・意見を教えてください。</p>	<p>T 発問する P 答える T 説明する T 発問する P 考える T 指示する P まとめる P 話し合う</p>	<p>■スライド（捕鯨賛成理由、反対理由とは）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本はクジラを食料として食べていきたいと主張。 ・イギリスはクジラが絶滅の危機にあると主張。 <p>【捕鯨について、賛成・反対の理由】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・絶滅の危機といわれてもあまり実感がわかない。乱獲をしなければクジラの数も増えていくと思うし、昔からの食糧だから賛成です。 ・一時停止を行っているので絶滅まで発展しないと思う。クジラを食べる文化がある国とない国があるのは当然であり、文化を否定することはいけない。 ・今の時代は食糧が多くあるため、クジラをわざわざ捕る必要はないと思うから反対です。 ・クジラの数が激減していて、このままいくと絶滅する恐れがあるから反対です。
<p>展 開 ② (40)</p>	<p>・捕鯨論争について、今までとは異なる立場から意見を言っている人たちがいます。</p> <p>・からくり人形のある部分に、クジラのある部分が使われています。どこだと思えますか。</p> <p>・クジラの髭が人形を動かす糸に使われています。クジラの髭は湿気を吸ってもほとんど変形しないので、人形を動かす精密な糸として使うことができます。</p> <p>・この工芸品にもクジラのある部分が使われています。どの部分だと思えますか。</p> <p>・クジラの歯です。歯を削ってこのような工芸品にするのです。</p> <p>・肉はもちろん、様々な商品にクジラは使われ、産業として根づいているので、捕鯨をやめては困るという立場の主張です。</p> <p>・次の写真です。日本では、まだ捕鯨を仕事として行っている人たちがいます。</p> <p>・その人たちの思いがこの新聞記事に書かれて</p>	<p>T 紹介する T 発問する P 答える T 説明する T 発問する P 答える T 説明する T 説明する T 紹介する T 紹介する</p>	<p>・捕鯨について、文化、保護以外に、どのような立場があるのだろうか。</p> <p>■スライド（からくり人形の写真）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人形の髪の毛にクジラの髭が使われているのかな。 <p>■スライド（からくり人形が動く様子）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クジラの髭はとても精密なことが分かった。 ・からくり人形を動かす糸に使われているなんて驚きだ。 <p>■スライド（クジラの歯を使った工芸品の写真）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クジラの歯が使われているのかな。 ・クジラの目が同じ色なので目を使っていると思う。 <p>■スライド（クジラを使った商品の図）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ブローチや革製品、バックなど、いろいろなものにクジラは使われているようだ。 <p>■スライド（捕鯨をしている様子の写真）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなで協力して仕事をしているのが分かる。 <p>■スライド（捕鯨漁師新聞記事）</p>

<p>います。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・産業として、いろいろなものにクジラは使われ、仕事にもなっている、捕鯨をつづけたいという立場の主張です ・一方で、これはクジラに関するグラフです。 ・日本では、クジラ肉の消費量が年々どんどん減っているのが分かります。 ・このグラフからは、他の肉に比べて、日本では、クジラ肉はほとんど食べられていないことが分かります。 ・これは、クジラに関する意識調査のグラフです。 ・消費に関して、クジラの肉はほとんど食べられておらず、意識調査からも、クジラを捕る必要はないという立場の主張です。 ・また、動物愛護団体は、ホームページ上で次のような主張をしています。 ・捕鯨は非常に残虐であり、捕鯨をやめた方がよいという立場の主張です。 ・これまでに、捕鯨論争について、賛成の立場、反対の立場の主張を紹介してきました。 ・今からは、賛成・反対、それぞれの主張と、みんなが出してくれた意見を総合的に考えて、捕鯨をつづけるべきか、やめるべきか、自分の立場を決めてもらいたいと思います。 ・ワークシートに、つづける、やめる、どちらかに丸をつけて、その理由を書いてください。 ・意見を教えてください。 ・捕鯨をつづけるに丸をつけた人、やめるに丸をつけた人。 ・このクラスでは、捕鯨をやめる立場の人がほんの少し多いようですね。 	<p>T説明する</p> <p>T紹介する</p> <p>T説明する</p> <p>T説明する</p> <p>T紹介する</p> <p>T説明する</p> <p>T紹介する</p> <p>T説明する</p> <p>T紹介する</p> <p>T説明する</p> <p>T説明する</p> <p>T発問する</p> <p>T指示する</p> <p>Pまとめる</p> <p>P話し合う</p> <p>T確認する</p> <p>T提示する</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・漁師の人たちは捕鯨を誇りに思っており、伝統を守っていきたいと考えていることが分かった。 ・捕鯨はずっとつづいてきた伝統なんだ。 <p>■スライド（クジラ肉推移グラフ）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クジラ肉はほとんど食べられていないようだ。 ・クジラ肉は年々減っているのが分かる。 <p>■スライド（クジラ肉消費グラフ）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本では魚介類が多く消費されているようだ。 ・クジラ肉はほとんど消費されていないようだ。 <p>■スライド（クジラ肉についての意識調査）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クジラ肉を必要としていないことが分かる。 ・日本人はクジラ肉がなくても構わないと思っているようだ。 <p>■スライド（動物愛護団体ホームページ）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ホームページを読むと残虐であることが分かる。 ・捕鯨はひどいやり方だと分かった。 <p>【捕鯨について、つづける・やめるの理由】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クジラの需要が少なくなっており、絶滅に至るほどの乱獲は行われないうからつづける。 ・需要の低下にともなって捕獲量も減らしていけばよいため、一気に止めなくてもよい。 ・クジラの需要はほぼないので、捕鯨をする必要はないと思うからやめてよい。 ・捕鯨が残虐だからやめるとなると、牛や豚も食べることができなくなってしまうのでつづける。 ・捕鯨の文化を大切にしていかなければいけない。 ・現在の日本ではクジラを食べなくても生きていけるし、必要としている人も少ないからやめてもいいと思う。 <p>クジラにとってもむごいことだし、そこまでして捕鯨をつづける必要はないと思う。</p>
---	--	---

ま と め (10)	・捕鯨論争以外にも、社会には、意見や立場が対立している問題があります。決定しきれない問題もあると思います。そういった問題に、どのように関わっていけばよいかを考えるきっかけに、今回の授業がなってくれたらいいと思っています。	T 説明する P まとめる	・捕鯨論争を考えると、どのような立場や意見があるか、それぞれの主張を見比べて考えることが大切だと分かった。捕鯨論争以外にも、社会にはどんな問題があるのか興味が出たし、どんな立場の人が、どのような主張をしているのか調べてみようと思う。
---------------------	--	------------------	--

I. 環境	絶滅危惧種採獲の観点からやめた方がいい。捕鯨一時停止の国際条約が提案され、商業捕鯨を禁止する動きがある。
II. 伝統	日本は昔から伝統的に捕鯨が行われてきた経緯があることを、資料をもとに確認し、伝統文化としての捕鯨の大切さを知る。
III. 産業	捕鯨で生計を立てている人がおり、仕事なくなる人も出てくる。捕鯨は日本の大事な産業の1つである。
IV. 消費	クジラの年間消費量のデータから、日本ではクジラの肉はほとんど食べられていない。捕鯨に関する消費者の意識調査からも捕鯨は必要ない。また、捕鯨は残虐である。

図 2. 資料の主な内容

7 授業の実際

開発した授業は、N大学附属中学校3年生38名を対象に実施した。本時の学習は、捕鯨について日本のような捕鯨賛成国と、イギリスのような捕鯨反対国の主な主張を基に、第1次意思決定において捕鯨賛成、反対の立場を決める段階から、賛成、反対の異なる立場の資料を追加提示して、意見の再吟味を促し、最終的に捕鯨に賛成するのか、反対するのか、自分の立場を決定するという授業展開である。

教師の発言と生徒の発言を区別するために、次のような記号を用いることにする。

教師の発言『 』 生徒の発言「 」

また、考察とワークシートによる生徒の意見を次のような記号で表す。

考察：※ ワークシートによる生徒の意見：○

以下、一般化モデルの3つの点について授業記録をもとに詳しく述べる。

●一般化モデル1点目・・・授業の導入で捕鯨写真を提示し²¹、捕鯨に対する関心を高めるところから授業を始めた。国際社会では捕鯨について賛成、反対と意見が分かれている現状を紹介し、「捕鯨論争について考えよう」と、学習課題を提示した。捕鯨賛成の主張には、伝統、産業についての意見がある。捕鯨反対の主張には、環境、消費についての意見がある。学習課題について追及を深めていく学習場面である。

『これは、捕鯨賛成国と反対国の表です』

『賛成39カ国、反対49カ国と、意見が対立しているのが分かります』

『捕鯨について、つづける・やめると、意見が分かれている問題を、捕鯨論争といいます』

『今日は、この捕鯨論争について、みんなで考えていきたいと思います』

『今日の学習課題です』

※クリティカルシンキングの育成を図る一般化モデルの1点目、複数の視点から比較、分類して考える学習活動を設定する場面である。捕鯨について、捕鯨賛成国、捕鯨反対国と意見が対立している。そして、その理由について、いろいろな立場の人が、様々な理由を基に主張している。賛成意見として、「捕鯨は伝統的な食文化なのでつづけたい」「産業として根づいているし、捕鯨をやめたら多くの人の仕事がなくなってしまう」と、伝統、産業についての意見がある。反対意見として、「クジラは絶滅の危機に瀕しており、国際捕鯨取締条約も締結されたので、世界的な流れからみてもやめるべき」「クジラ肉はほとんど食べられていないし、文化は時間とともに衰退していくものである」と、環境、消費についての意見がある。捕鯨論争について考えることで、複数の視点から、注意深く論理的に分析する学習活動を展開することができる。

●一般化モデル2点目・・・捕鯨賛成国の主な主張、捕鯨反対国の主な主張を踏まえ、自分は捕鯨に賛成か反対か、第1次意思決定を行う学習場面である。

『捕鯨について、食料資源なので、ずっとつづけたいと主張する立場と、絶滅の危機に瀕しており、やめた方がいいと主張する立場があります』

『では、この2つの説明を聞いて、自分はどちらの立場を支持しますか』

『少し考えてみてください』

※クリティカルシンキングの育成を図る一般化モデルの2点目、対立軸をもって考える活動を展開する。例えば、賛成・反対、つづける・やめるといった対立する学習場面を意図的に作り出すことである。

捕鯨論争では、日本のように捕鯨を食文化として残したい、イギリスのように絶滅の危機に瀕しているのだから捕鯨をやめたいと意見が対立している。自分の立場を決めるときには、資料やデータから理由や根拠を探したり、物事の間接関係をつかんだりして検討していくことが必要になる。

○賛成意見

「絶滅の危機といわれてもあまり実感がわかない。日本の食糧自給率の問題の方がより身近で重要性も高い」「一時停止を行っているのだから、絶滅まで発展しないと思う。クジラを食べる文化がある国とない国があるのは当然であり、文化を否定することはいけない」

※国際捕鯨取締条約の資料を根拠に、国際捕鯨委員会が捕鯨の一時停止を行い、クジラに回復期間を与えていることから、絶滅まで発展しないのではという意見である。一時停止と絶滅との関係を考え、クジラの今後について自分なりに予想を立てて、捕鯨に対する立場を決めたことが読み取れる。

また、日本は食文化としてクジラを食べてきた経緯から、文化面に対しての自分の考えを述べている。クジラを食べる国と食べない国の存在を認めつつ、その国の文化を尊重する必要性から賛成の立場に傾いたことが分かる。

○反対意見

「今の時代は食糧が多くあるため、クジラをわざわざ捕る必要はないと思う。また、絶滅してからでは、元の状態へ戻すことはとても困難である」「クジラの数が増減していて、このままいくと絶滅する恐れがある。歯止めをかけないといけないし、今の状態を維持していかなければならないと思う」「日本の捕鯨は文化だと言っているが、もう継承する人は少ない」

※クジラは日本の文化であるという意見に対して、捕鯨を継承する人はもう少ないのではと異議を唱えている。また、飽食の時代にあって、絶滅の危機に瀕しているクジラをわざわざ捕って食べる必要はないと反対の意見を述べている。捕鯨が食文化になっているという意見に対して、本当にそうなのかと疑いながら、対立する立場の主張を見比べて考察し、自分の考えを述べていることが分かる。

また、「元の状態へ戻すことは困難」「今の状態を維持していかなければならない」という意見から、文化の継承とクジラの保護について、相反する立場の主張を比較、検討し、絶滅してしまえば文化の継承もできないという両者の関係性をつかみ、反対の立場に傾いたことが読み取れる。

●一般化モデル 3 点目・・・第 1 次意思決定で出された意見と、追加の資料から総合的に考えて、捕鯨論争について第 2 次意思決定を行う場面である。

『これまでに、捕鯨論争について、賛成の立場、反対の立場の主張を紹介してきました』
『今からは、賛成・反対、それぞれの主張と、みんなが出してくれた意見を総合的に考えて、捕鯨をつづけるべきか、やめるべきか、自分の立場を決めてもらいます』

※クリティカルシンキングの育成を図る一般化モデルの 3 点目、決定する場면을学習活動の最後に位置づけることである。第 1 次意思決定において、捕鯨賛成、捕鯨反対について自分の立場を決めた。この立場について、追加の資料や友達の意見を基に、意見の再吟味を行い、最終的に自分の立場を決めていく学習場面である。追加の資料として、賛成側では、捕鯨は産業になっている、仕事として生計を立てている人がいるという資料を提示する。反対側では、クジラ肉はほとんど食べられていない、意識調査から必要ない、捕鯨は残虐であるという資料を提示する。

捕鯨論争に対して、これまでとは違った視点の資料を追加提示することで、自分の意見の再吟味を促し、様々な諸資料を多面的・多角的に考察して、最終的に自分の立場を決定することができる。

『ワークシートに、つづける、やめる、どちらかに丸をつけて、その理由を書いてください』

『意見を教えてください』

○つづける

「捕鯨をするといっても、それは資源を利用することが目的であるため、クジラの需要が少なくなってきた現在の現では、絶滅に至るほどの乱獲は行われないうし、需要の低下にともなう捕獲量も減らしていけばよいため、一気にやめなくてもよい」「捕鯨が残虐だからやめるとなると、私たちは牛や豚も食べることができなくなってしまう。命をもらっているから、感謝の気持ちを持って、そういうことを考えながら、捕鯨の文化を大切にしていかなければいけない」

※捕鯨の残虐性の資料から、残虐性を認めつつも、他の動物は食べているのに、クジラだけ食べないのはおかしいと意見を述べている。需要と供給の関係を踏まえて、今のクジラの需要量なら絶滅まで発展しないのではと考えている。クジラをいただくことに感謝をしながら、捕鯨をつづけていきたいと自分の立場を決めたことが読み取れる。

○やめる

「クジラの需要がほぼないので、捕鯨をする必要はないと思う。クジラを身近に感じている人は少ししかいないので、やめても困らない」「現在の日本ではクジラを食べなくても生きていけるし、必要としている人も少ないからやめてもいいと思う。クジラにとってもむごいことだし、そこまでして捕鯨をつづける必要はないと考える」

※クジラの消費量や意識調査の資料から、クジラ肉はほとんど消費されておらず、必要としている人も少ないという事実を読み取り、この資料を根拠にして、やめてもよいという結論に至った。また、残虐性にまで意識を向けつつ、そこまでして捕鯨をつづける理由はないと自分の立場を決めたことが読み取れる。

8 考察

生徒の発話記録やワークシートに基づいて考察を行う。

第 1 次意思決定の捕鯨賛成意見として、「絶滅の危機といわれてもあまり実感がわかない」「一時停止を行っているので、絶滅まで発展しないと思う」という意見から、反対の主な意見である、絶滅の危機に瀕しているという主張に異議を唱えている。「文化を否定することはいけない」「将来のために現在の食文化を衰退させるのは間違っている」「クジラを食べる文化がある国とない国があるのは当然」という意見から、賛成の主な意見である、文化を守っていききたいという主張を補強している。

第 1 次意思決定の捕鯨反対意見として、「絶滅してからでは、元の状態へ戻すことはと

でも困難である」「今の状態を維持していかなければならないと思う」という意見から、反対の主な意見である、絶滅の危機に瀕しているという主張を補強している。「今の時代は食糧が多くあるため、クジラをわざわざ捕る必要はない」「日本の捕鯨は文化だと言っているが、もう継承する人は少ない」という意見から、賛成の主な意見である、捕鯨文化について異議を唱えている。

第1次意思決定の発話記録やワークシートから、賛成の主な意見について補強するか反対するか、反対の主な意見について補強するか反対するかという、相反する2つの側面からでしか捕鯨論争を考えることができていないことが分かる。このような状態では、捕鯨論争についてクリティカルに考えているとはいいがたい。追加の資料の必要性を指摘できる。

第2次意思決定のつづける立場の意見として、「絶滅に至るほどの乱獲は行われぬ」「捕鯨の文化を大切にしていかなければいけない」「捕鯨が残酷だからやめるとなると、私たちは牛や豚も食べるができなくなってしまう」という意見から、絶滅や文化に加えて、捕鯨の残酷性にまで意識を向けている。

第2次意思決定のやめる立場の意見として、「クジラの需要がほぼないので、捕鯨をする必要はない」「現在の日本ではクジラを食べなくても生きていけるし、必要としている人も少ない」「クジラにとってもむごいこと」という意見から、絶滅や文化に加えて、クジラの需要や捕鯨の残酷性にまで意識を向けている。

文化、絶滅という2つの側面から捕鯨論争を考えた場合、賛成意見として、絶滅はない、文化を維持していく、反対意見として、絶滅する、文化は必要ないという、お互いが同じ側面から意見を出し合うことになり、意見がかみ合うことはないだろう。

違った視点からの追加資料によって、自分の意見の再吟味を促し、複数の視点から多面的・多角的に考察して、最終的な結論を出すことができる。

次に、第1次意思決定から第2次意思決定までに、生徒の意見がどのように変化したのかを見ていく。まずは、意見が変わらなかった生徒のワークシートを読み取ってみる。

○第1次意思決定反対、第2次意思決定反対

第1次意思決定では、「クジラが一匹もいなくなったら悲しいし、国際捕鯨取締条約にもあるように、クジラを将来の世代に残すことは大切だと思うからです。でも、捕鯨で生活している人もいますので、一時停止までしなくてもいいのかなと思います」

第2次意思決定では、「捕鯨をしてきた人のプライドや気持ちもなんとなく分かるけど、でも、きっと捕鯨は苦痛だと思うし、単刀直入に言えば、あまり必要とされていないクジラは、昔の文化として残して、食材として見ることは変えるべきではないかと思う」

第1次意志決定では、クジラを将来の世代に残す必要性から、捕鯨に反対としている。

追加資料によって、この意見をさらに確かなものになっている。捕鯨存続の是非について、捕鯨の残虐性や消費の観点からも検討した上で、食糧としてクジラを見ることをやめて、昔の文化として残すことが大切という結論に至った。

追加の資料提示によって、捕鯨反対の理由について再吟味を行い、自分がした判断の妥当性を再検証することで、より確かな根拠を持って自分の立場を決定したことが読み取れる。

一方、第1次意志決定から第2次意志決定までに意見を変えた生徒のワークシートを読み取ってみる。

○第1次意志決定反対、第2次意志決定賛成

第1次意思決定では、「私はクジラがそんなに重要な食糧資源だとは考えていない。目先のことで絶滅させてしまったら、二度と食べられないため、今は数を増やすことの方が大切だと思う」

第2次意思決定では、「やめるといっても一気にやめてしまえば、クジラを使った物や文化が消えてしまうので、できる限り減らし、将来的には長く継続できる捕鯨を行っていくといいと思った。生命を食べているから、残虐なのは仕方ないと思う」

第1次意思決定では、絶滅させてしまったら二度と食べられない、数を増やすことが大切とクジラの保護の重要性を述べている。追加資料によって、クジラ産業や文化の存続にまで意識を向けて、長く捕鯨をつづける方がよいのではと考えが変化したことが読み取れる。第1次意志決定では、捕鯨をやめることの影響について考えるに至っていないが、追加資料によって、捕鯨禁止と産業、文化とのつながりを理解して、捕鯨禁止の影響を考慮した上で、捕鯨をつづけていくためにどうしたらよいのかと、捕鯨存続に向けた考えに変化したことが読み取れる。

追加資料によって、違った視点からの判断を促し、物事の関係性を踏まえた上で、自分の意見は本当に正しいのか、もっとよい方法はないのかと意見の再吟味を行うことができる。

最後に、第2次意思決定の理由について、ワークシートの記述から抜き出してみる。

○つづける意見として、

食を得るために殺すのは仕方ない、残虐なのは他の動物も同じ、絶滅したら食べられない、クジラ一匹で使えるものが多く無駄がない、仕事として生きている人がいる、クジラの利用方法の図から日本に多大な利益をもたらす、重要な食糧、食べるものがない国にとっては大事な食糧、動物を殺して食べるのは人間にとって必要な営みで人間としての生活を根本から否定するのはよくない

○やめる意見として、

絶滅してしまつては文化を継承できない、残虐性には驚いたしこのようなことをつづけるべきではない、クジラを捕る人も精神的に辛いし違う捕獲方法を考える必要がある、クジラ肉を必要とする人はあまりいない、日本の食卓にクジラは出ないので今の文化には必要ない、クジラの需要がない、捕鯨をやめても自分たちの生活に支障がない、捕鯨産業ではなく新しい産業をはじめればよい

上記が主な理由として抽出することができる。これらの意見から、絶滅、文化という 2 つの側面から考えるのではなく、複数の資料や意見を見比べ、多面的・多角的に考察し、理由や根拠を探した上で、捕鯨論争に対する意思決定をしたことが読み取れる。また、下線部の記述から、資料からは読み取ることのできない、食べ物が無い国や人間としての生活について考え、違う方法や新しい産業について代替案を提案している。資料を通して、その奥に潜む背景や因果関係にまで思いを巡らせ、どうすればよりよくなるのかを考えていくことは、まさしく、クリティカルシンキングといえるのではないだろうか。

授業では、第 1 次意志決定において、捕鯨論争の基本的な内容を理解した上で、捕鯨論争における自分の立場を決めた。そして、第 2 次意志決定までに提示した追加資料から、自分の意見の再吟味を行い、複数の視点から多面的・多角的に考察して、最終的な意思決定を行った。発話記録やワークシートの記述から、思いつきやなんとなくという意見ではなく、理由や根拠を基にして、批判的に吟味した上で自分の立場を決定したことが読み取れる。本時の授業は、クリティカルシンキングの育成に一定の成果を果たした授業といえるのではないだろうか。

本時で学んだことを生かして、生徒が現代社会の諸問題に対して、多面的・多角的に考察を行うことを介して、各自の判断を下していく姿を期待している。

※本論文は、2016 年日本環境教育学会第 27 回大会での研究発表をもとに加筆修正したものである。

引用・参考文献

1) 中央教育審議会答申「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について～知の循環型社会の構築を目指して～（答申）」(2008)

www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/.../080219-01.pdf (2016 年 8 月 1 日アクセス)

2) 中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」(2012)

www.mext.go.jp/component/b_menu/.../1325048_1.pdf (2016 年 8 月 1 日アクセス)

3) 文部科学省「教育の情報化ビジョン～21 世紀にふさわしい学びと学校の創造を目指して～」

(2011)

www.mext.go.jp/b_menu/houdou/.../1305484_01_1.pdf (2016年8月2日アクセス)

- 4) 樋口直宏 (2014) 『批判的思考指導の理論と実践ーアメリカにおける思考技能指導の方法と日本の総合学習への適用ー』学文社 pp.4
 - 5) 前掲書 4) pp.1
 - 6) 前掲書 4) pp.1
 - 7) 鈴木健・竹前文夫・大井恭子 (2006) 『クリティカル・シンキングと教育ー日本の教育を再構築するー』世界思想社 pp.4
 - 8) 著作：E. B. ゼックミスタ、J. E. ジョンソン、訳者：宮元博章、道田泰司、谷口高士、菊池聡 (1996) 『クリティカルシンキング《入門編》』北大路書房 pp.4
 - 9) 前掲書 8) pp.5
 - 10) 楠見孝・子安増生・道田泰司 (2011) 『批判的思考力を育むー学力と社会人基礎力の基盤形成ー』有斐閣 pp.6
 - 11) 前掲書 10) pp.6-7
 - 12) 石井敦 (2011) 『解体新書「捕鯨論争」』新評論 pp.5-11
 - 13) 前掲書 12) pp.20-24
 - 14) 小松正之 (2007) 『歴史と文化探訪 日本人とくじら』ごま書房 pp.28-30
 - 15) 前掲書 14) pp.48-50
 - 16) 前掲書 12) pp.54-57
 - 17) 前掲書 12) pp.148-150
 - 18) 前掲書 12) pp.154
 - 19) 原剛 (1983) 『ザ・クジラー海に映った日本人ー』文眞堂 pp.251-254
 - 20) 文部科学省「中学校学習指導要領解説社会編」(2008)
- www.mext.go.jp/component/a.../1234912_003.pdf (2016年8月2日アクセス)
- 21) 前掲書 14) pp.23